

聖書：エペソ人への手紙5章10～20節

説教：光によって明るみを出す

はじめに

今日の箇所のように、ああしなさい、こうしてはいけません、という命令が続くと、なんだかうんざりしてきます。パウロのような人なら簡単にできても、我ら凡人クリスチャンにはとてもできそうもない。そんなふうな投げやりな気分にはさえないです。けれども、神の救いには差別はないはずで、エリートクリスチャンとかダメクリスチャンというようなものもあるはずはない。であるならば、ここに書かれていることは難しいことではなくて、だれもができる単純なことではないのか。私たちを苦しめるためにではなく、むしろ背中に背負い込んでいる重い荷物を軽くして、楽にさせるために書かれているのではないか。それはどういうことなのか。ともに考えてまいります。

1 主に喜ばれること

1) 吟味する、注意する

10節。「何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。」15節にはこうあります。「ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。」ことばは違いますが、どれも同じことを言っているようです。8節のところに「今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい」とありました。救われた者は、自分がどのように歩んでいるのか、吟味する、注意を払うものですよ、と教えています。

2) 機会を十分に活かす、細かく

どれくらいの頻度で注意を払うのかというと、16節に「機会を十分に活かしなさい」とあります。そして、どの程度するのかというと、「細かく注意を払いなさい」とあります。手を抜いてはいけないということです。

3) 悪い時代だから

それだけでも大変だと思うのですが、16節後半にはこうもある。「悪い時代だからです。」悪い時代と聞くと、すぐに戦争のことや異常気象のこと、あるいは詐欺事件などを思い浮かべるかもしれない。そのとおりではあるのですが、ここはもう少し身近なこととしてとらえたほうがよいように思います。

真面目な方は、ここに書かれているのを読み、こう考えるでしょう。「光の子どもとしてふさわしく歩んでいるか、細かく注意を払わなければいけない。」でもどうでしょうか。簡単にできるでしょうか。以前誰かがおっしゃっていました。「これが難しいんです。」そのとおり。難しい。どうして難しいのか。信仰が弱いからでしょうか。まだ未熟なクリスチャンだからでしょうか。そうではない。世の中のあらゆることが私たちに働きかけてきて、邪魔をするので難しいのです。例を挙げれば、テレビのコマーシャルを見た途端にその商品が欲しくなる。世の中は私たちの欲望をかき立てるような情報を次々と流してきて、心を乱そうとしています。時間についてもそうです。世の中の時間の流れがどんどん速くなり、そのスピードについていくためにみな四苦八苦している。こうしてゆっくりと考える暇を与えない。こんな世界で、自分の歩みに注意せよと言われても、よほどの覚悟がいります。難しくて当然なのです。

2 光

1) 闇の中にある：死

でも、悪い時代が嫌だからと言ってそこから出ていくわけにはいきません。では諦めるしかないのか。いいえ、そんな必要はありません。神はどのような方でしょうか。私たちを罪から救うためにご自分のいのちさえ十字架で捨ててくださった方です。その方が、“あなたを救って上げました。あとは自分の力で歩んでください。あとのことは自分で責任をとりなさい。”と言うのでしょうか。そんなことはありません。この悪い時代のなかで私たちが気落ちしないようにと神は御霊を送ってください、私たちに励ましてくださいます。どのようにしてでしょうか。

ここからもう少し先に進みましょう。11節から13節。「実を結ばない暗闇のわざに加わらず、むしろ、それを明るみに出しなさい。彼らがひそかに行っていることは、口にするのも恥ずかしいことなのです。しかし、すべてのものは光によって明るみに引き出され、明らかにされます。」

主に喜ばれることは何だろうか、そのことを考えようとするとき、問題はどこからスタートするかです。そんなことは関係ないのではと思うかもしれませんが、あれをすること、これをする、そ

のように外の目に見える所だけなら、確かにどこからスタートするか関係ないでしょう。

しかし神はどのような方でしょうか。外の目に見える所だけをご覧になる方なののでしょうか。律法学者たちはそのように考え、行いの信仰に走りまわりました。しかしイエス・キリストは、そのような信仰を厳しく非難されたことは皆さんご存じのとおりです。ということはやはりスタート地点が大切です。外に目を向けるのではなく、まず自分の内側に目を向ける。そこがスタートです。そうしたらなにがありますか。真っ白でなにも悪いものはありません、と言う人がいたら、おそらく罪というものがある、と皆さんよくわかっていない。イエス・キリストに救われたことをよくわかればわかるほど、実を結ばない口にするのも恥ずかしいことがたくさんあるのが見えてきます。

2) 明るみに出す

それをどうするか。それを明るみに出しなさい、とあります。言い換えれば、明るい光の中にさらしなさいということです。口にするもの恥ずかしいことを光の中にさらす。まともにやろうとしたら、これはとても恐ろしい。とても恥ずかしいことです。もしもキリストによって救われていなかったなら、絶対にやりたくない。死ぬまでずっと隠し続ける。墓場まで持っていくという人もいます。

そんな人が嫌がるようなことなのに、どうしてしなさいと言うのでしょうか。理由は二つある。一つは、キリストが口にするものが恥ずかしい罪のために十字架でいのちを捨ててくださったから。二つ目は、もしそのままにしているのなら、あなたはそれとずっと苦しみ続けていくことになるから。主の前に荷を降ろして、楽になりなさいと言ってくださっているのです。

3) 光となる：よみがえり

さて、暗闇のなかにあって口にするのも恥ずかしい罪を光の中に明るみに出したら、何が起きるのか。14節前半にこうある。「明らかにされるものはみな光だからです。」この訳では、なんだか意味がよくわからない。こう訳し直した方がわかりやすい。「悪いものは、明るみに出されて光にさらされると光に変えられるのです。」こんなことを言うと驚くかもしれません。「口にするのも恥ずかしいことが、どうして光という良いものに変えられるのか。悪いものはどこまでも悪いものに決まっている。」

なぜ光に変えられるのか。14節後半にこうある。「眠っている人よ、起きよ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる。」この箇所は、イザヤ書60章1節の思想を別の形で表現したものだそうです。いずれにしても、パウロはこんなことを言いたいようなのです。闇の中にあった口にするのも恥ずかしいものは、死んだ人と同じ状態です。けれどもキリストの光によって照らされたとき、死んでいたものが起き上がり、よみがえったとき、もうそれは死んだものではなく生き返っている。それで光となるのです。

よみがえりというと、これまではイエス・キリストが再び来られる日に私たちのからだに起きる未来のことと思っていました。そのとおりなのですが、実は日々の生活のなかでも起こることとらえています。もし闇の中にあるものを光にさらして明らかにしていっていったら、あなたはよみがえりのいのちを経験する、と言っているのです。

3 御霊に満たされる

1) 互いに語り合う

これまで暗闇のなかにあるものを明るみに出しなさい、と言ってきました。では具体的にはどうすることなのでしょう。19節にこうあります。

「詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。」人はどんなときに歌うのでしょうか。嬉しいとき、愉快的とき、楽しきとき、そんなとき自然に歌が出てきます。プログラムで決まっているので歌うというよりも、気がついたら歌っている自分がいる、ということです。

ではどんなとき嬉しくなるのでしょうか。「詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い」とあります。まず始めにあるのは「語り合う」ということです。教会の中で互いに自分の弱さを語り合うとき、私たちは慰めを経験します。そのとき、口から自然に賛美の歌がこぼれていく。後になってから、あのとき私たちは御霊に満たされていたのだと告白していきます。

2) 父なる神に感謝する

そうしてだんだんわかっていくのは、神がどれほどまでに私たちのことを愛しているのか、ということです。聖書に書かれていることはほんとうだった。いまでも神は働いてくださり、御霊を与えてくださって、このようにして私たちを造り変え、一つにしてくださろうとしている。そのことがわかったとき、神への感謝のことばとともに、私たちの背中

にあった荷は軽くなっていくことに気がつくのです。

このようにして導いてくださる主とともにまた歩んでまいります。